

「即ち資本としての貨幣の價值、語を換へていへば利子率のこと。蓋し商品と比較して謂ふ貨幣としての貨幣の價值は、この場合不變となつてゐるからである」の斯かる變動に順應した處置を採らねばならない。これを専門的の言葉でいへば、利子を引上げるといふことになるのである。」

(第三八一九號)「私は決して兩者〔貨幣と資本〕を混同するものではない。」彼は、決して兩者を區別しないといふ單純な理由からして斯く謂ふのである。

(第三八三四號)「我國の生活必需品〔一八四七年に於ける穀物〕に就いて支拂はれねばならなかつたところの、實際に資本となつてゐた巨額の貨幣。」

(第三八四一號)「割引率の上に生ずる變動は、金準備〔イングランド銀行の〕状態と極めて密接に關係してゐることは疑ひを容れない。蓋し金準備の状態如何は、一國に存する貨幣量の増大又は減少の指標となるからである。而して一國の貨幣が増大するか減少するかに比例して、貨幣の價值は低落するか又は増騰する結果を來たし、銀行割引率はこれに順應することとなる。」即ち彼は第三七五五號の中で經濟的に否認した事を、茲でまた是認してゐるわけである。——(第三八四二號)「兩者の間には密接の關係がある。」兩者とは、イングランド銀行の發行部に於ける金の量と銀行營業部に於ける銀行券の準備とを謂ふ。彼れは此場合、貨幣量の上に生ずる變動を以つて利子率の上に生ずる變動を説明してゐるのであるが、これに就いて彼れの謂ふ所は虚偽である。國內の流通貨幣が増大するから、準備金は減少し得るのであるが、これはヨリ多くの銀行券が公衆の手に渡つて而も金屬準備が減少しない場合に行はれる所である。だが、利子率は此場合に増騰する。蓋しイングランド銀行の銀行營業資本は、一八四四年の法律に従つて、斯かる場合には制限されることになるからである。けれども彼れは、これに就いて言ふことを許されない。なぜならば右

の法律は、兩部局の間に何等共通した點のないことを規定してゐるからである。

(第三八五九號)「利潤率が増進すれば、資本の需要は増大し、資本の需要が増大すれば、資本の價值は増騰することになるであらう。」斯くして遂に、オヴ・ストーンの考へてゐる如き、利潤率の増騰と資本需要の増大との關係に到達する。さて、一例を擧ぐれば一八四四年から四五年にかけて木綿製造業には高き利潤率が行はれてゐたが、これは木綿製品の需要が大であつて、而も棉花は低廉であり且つ其状態を續けてゐた結果である。製造業者の立場から見れば、資本の價值(曩に掲げた供述に依れば、オヴ・ストーンは、各人がその營業上に要する所の物を以つて資本と名づけてゐる)即ち此場合に於ける棉花の價值は、増大したことになる。所で利潤率が大であつたため、營業擴張の目的を以つて貨幣を借受けんとする木綿製造業者もあつたであらう。斯くして増大することになつたものは、貨幣資本の需要であつて、それ以外の何物に對する需要でもなかつた。

(第三八八九號)「金は貨幣ともなり得るし、又は貨幣以外のものともなり得ること、尙ほ紙が銀行券ともなり得るし、又はそれ以外のものともなり得る如くである。」

(第三八九六號)問「然らば貴下は、イングランド銀行の發行に係る流通券の上に生ずる變動は、金準備高の上に生ずる變動に準據するといふ、一八四〇年に與へた前説を撤回したものと解して宜しいであらうか？」答「現在に於ける我々の知識標準を以つてすれば、流通券といふ中にはイングランド銀行の準備金中に存する銀行券をも含めて考へなければならぬ……といふ意味に於いて、私は前説を撤回するものである。」——これは誇大な主張である。イングランド銀行は其保有する金準備高を超過すること一千四百萬磅まで銀行券を發行し得るといふ專擅的な規定は、銀行券の發行が金準備の變動につれて變動するといふ意味を含むことは勿論である。けれどもイングランド銀行が右の規定

に従つて作製し得る所の、その發行部から銀行營業部に移轉される銀行券の量は、それらの兩部局間を流通し且つ同銀行の金準備の變動につれて變動するものであるが、それに依つて同銀行の外部に行はれる銀行券流通の變動が決定されるものでないことは、『現在に於ける我々の知識標準』が示すところであるから、この後ちの流通、換言すれば現實的の流通は、今や同銀行の營業にとつては何うでも可い事となり、兩部局間の流通(この流通と現實的の流通との區別は準備金の上に示される)のみが決定的となつて來るのである。イングランド銀行の銀行券發行が如何なる程度まで法定の最高限に近づいて居り、取引客が尙ほ幾許を銀行營業部から受け得るかといふ事は、準備金の上に示されるのであるが、その限りに於いてのみ、右の流通は外部の世界にとつて重要となるのである。

左の供述は、オヴァーストーンの惡意を示すところの燦爛たる實例となるものである。

(第四二四三號)問「資本の量なるものは、最近數年間割引率變動の上に見られた如き變化を價值の上に生ぜしめる程著しく一つの月から他の月に互つて變動するものと、貴下は考へられるか？」答「資本の需要供給間の比率が短期間内にも變動し得ることは疑を容れない。……若し明日にもフランスが巨額の借款をなす旨發表したとすれば、それは忽ちにして、イギリスに於ける貨幣の價值換言すれば資本の價值の上に、大なる變動を生ぜしむることは疑ひを容れない。」

(第四二四五號)「フランスが若し何等かの目的のため突如として三千萬磅の商品を要する旨發表したとすれば、それは——ヨリ科學的にして單純なる言葉を用ひていへば——資本に對する一大需要を喚び起すことになるであらう。」

(第四二四六號)問「フランスが其借款を以つて購買せんとするかも知れない資本は、一つの事項であり、フランスが依つて此資本を購買するところの貨幣は他の事項である。價值を變ずるものは貨幣であるか、否か？」答「また元の問

題に戻つて來た。私は信ずる、斯様な問題は、この委員室よりも寧ろ科學者の研究にヨリ適してゐることを。」——彼れは斯く述べて退却してゐる。が、研究室へ、ではない(八十五)。

(八十五) 資本の問題に關するオヴァーストーンの概念錯亂に就いては、第三十二章の終末で更らに述べる。

第二十七章 資本制生産に於ける信用の役割

以上、信用制度に依つて誘起された一般的叙述は、左の如くであつた。

I 利潤率の平均化を與へ、又は全資本制生産の基礎たる此平均化の運動を助長するため、必然的に信用制度が生じて来る。

II 流通費用の節減。

(一) 主要なる流通費用の一つとなるものは、價值それ自身を代表するといふ方面から見た貨幣そのものである。この貨幣は信用に依つて次の如く三通りに節約される。

A 取引の大なる部分にとつては、それは全く削除されてしまふ。

B 流通要具の流通速度が進められる(八十六)。これは一部的には(二)の下に述べるところの事實と一致するものである。即ち一方からいへば、この速度増進は技術的のものである。換言すれば、消費の爲に行はれる現實的な商品取引の大さと量とが不變である限り、ヨリ少量の貨幣又は貨幣表章を以つて同一の働きをする。これは銀行營業上の技術と關聯するものである。他方に於いて、信用は商品轉形の速度と、隨つて又貨幣流通の速度とを増進せしめる。

(八十六) 『フランス銀行の發行券の平均流通高は、一八二二年には一億六百五十三萬八千フラン、一八一八年には一億一百二十萬五千フランであつた。然るに貨幣の流通、換言すれば一切收支の總額は、一八二二年には二十八億三千七百七十一萬二千フラン、一八一八年には九十六億六千五百三萬フランであつた。即ちフランスに於ける一八一八年の流通活動は、一八一二年の

夫れに對して三對一の比例を示した譯である。流通速度に對して、大なる調節器となるものは即ち信用である。……これに依つて、金融市場に對する甚だしき壓迫が何故、充實した流通と常に一致するかを説明することが出来る(匿名者著『通貨問題論評』第一六五頁)。「一八三三年九月から一八四三年九月に至る間、グレート・ブリテンにはそれ自身の銀行券を發行する約三百の銀行が設立された。これがため、銀行券の流通は二百五十萬磅の制限を來たすことになつた。即ち一八三三年九月末に於ける銀行券の流通高は三千六百三萬五千二百四十四磅であつたが、一八四三年九月末にはそれが三千三百五十一萬八千五百四十四磅に減じたのである(前掲、第五三頁)。「スコットランドでは流通が極めて活潑であつたため、イングランドに於いて四百二十磅を要する取引高も一百磅を以つて處理し得る有様である(前掲、第五五頁)。この最後の叙述は、營業の技術的方面にのみ關聯するものである。

C 紙幣を以つて金貨に代用する事。

(二) 信用は、流通即ち商品轉形の個別的段階、更らに進んでは資本轉形の個別的段階の進行を速かならしめ、斯くしてまた再生産行程一般の進行をも速かならしめる(他方に又、信用は購買行爲と販賣行爲とが久しきに亙つて分離されることを許すものであるから、この意味に於いて投機的基础たるに役立つものである)。準備金が縮小される。これは二つの方面から觀察し得る。即ち一方には、流通要具の節減として、他方には、常に貨幣の形で存在せねばならぬ資本部分の制限として觀察し得るのである(八十七)。

(八十七) 『銀行の設立以前に在つては、流通要具の機能に必要とされる資本の高は、現實的の商品流通に必要とされる資本の高よりも常に大であつた(『エコノミスト』誌、一八四五年刊、第二三八頁)。

III 株式會社の成立。これに依つて次の結果が生じた。

(一) 個別的資本にとつては不可能であつた生産及び企業規模が異常に擴大されると同時に、従前政府の經營に屬

してゐた如き諸種の企業が社會的のものとなる。

(二) それ自身に於いて社會的生産方法に立脚し、且つ生産機關及び勞働力の社會的集積を前提する所の資本は、この場合、私資本に對立した社會資本(直接に結合された個人々の資本)たる形態を直接に與へられ、而して此資本を以つてする諸企業は、私企業に對立した社會企業たる形態を採る。これ即ち、資本制生産方法それ自身の限界内に於いて、私有たる資本を廢除することに等しいのである。

(三) 現實的に機能を盡す資本家は、他人の資本の單なる經營者たり管理者たるに過ぎない人となり、資本所有者は單なる所有者たる貨幣資本家たる人に過ぎない人となる。彼等の受ける配當が、利子及び企業利得の合計たる總利潤を包括するとしても(蓋し經營者の受ける俸給なるものは、他の各勞働と同様に勞働市場で價格を調節される一定種類の熟練勞働の勞銀に外ならず、又は外ならないとされてゐるからである)この總利潤は利子としてのみ、換言すれば資本所有の單なる報償としてのみ、收納されるのである。資本所有は今や全く現實的再生産行程上の機能から分離されるやうになること、尙ほ經營者の人格に含まれる此機能が資本所有から分離される如くである。かくして利潤は(もはや、其一部にして借受者の利潤からそれ自身を正當ならしむる論據を得て來るところの利子のみではなく)、生産機關が資本に轉化されて現實的の生産者から分離され、それが他人の所有物として、現實に於いて生産上に活動しつつある一切の個人々人(上は經營者より下は最下低の日傭勞働者に至る)に對立する結果生じて來るところの、他人の餘剩勞働の單なる占有に過ぎないものとして表現されるやうになる。

株式會社に於いては、機能は資本所有から分離され、隨つて勞働も亦全く生産機關及び餘剩勞働の所有から分離されてゐる。資本制生産の最高の發達に依つて與へられる斯くの如き結果は、資本が生産者の所有に、だが最早個別的

生産者の私有としてではなく、結合生産者の所有として、直接の社會所有として、再轉化されて行く進路の必然的な通過點となるものである。他方に又、それは從來資本所有との結合から尙ほ未だ分離されなかつた再生産行程上の凡ゆる機能が、結合生産者それ自身の單なる機能に、社會的機能に轉化されて行く進路の通過點ともなるものである。

更らに論を進めるに先だち、經濟上重要な左の事實に就いて注意を促がさねばならない。即ち利潤はこの場合、純粹に利子の形を採るものであるから、斯種の諸企業は單なる利子を生ずるに過ぎない場合にも尙ほ可能である。而してこの事實は、一般的利潤率の低減を阻止する原因の一つとなるものである。蓋し不變資本が可變資本に比して巨大なる範圍を占める此等の企業は、一般的利潤率への平均化に必ずしも關與するとは限らないからである。

(マルクスが以上の如く書いてから、爾後株式會社の二乗及び三乗を代表する産業經營の新たなる形態が發展して來たことは人の知る所である。今日、一切の大産業的部面に於いて生産を増進し得る速度は日毎に高められてゐるのであるが、この傾向は、斯様にして増大された生産物に對する市場の擴張が絶えず益々緩慢になるといふ事實に依つて對抗される。大産業に於いて數ヶ月間に造り出されるものの物は、數ヶ年を以つてしても尙ほ市場に吸収し盡され得ない有様である。加ふるに保護稅政策なるものが存在してゐるため、各工業國は他の工業國、殊にイギリスから隔立して、人爲的に國內の生産能力を益々高めて行く。その結果として、一般的の慢性過剩生産が生じ、物價は壓下されて、利潤は低減し、甚だしきはそれが全く消滅してしまふこともある。約して言へば、多年誇りとされてゐた競争の自由は如何ともすべからざる状態に達して、その公々たる屈辱的な破産を、みづから宣言せねばならなくなるのである。而して此傾向は、各國内に於ける一定の生産部門に屬する大産業資本家たちが、生産の調節を行ふため相聯合してカルテルを組織するやうになるといふ事實に依つて示される。カルテルの一委員は各工場で造らるべき生産物

の量を確定して、取引先から受けた注文を終極的に按排してゆくのである。しかのみならず、暫行的には國際的カルテルに達した場合さへある。例へば、英獨兩國間の鐵生産カルテルの如き、即ちそれである。

然し生産社會化の斯かる形態を以つてしても、尙ほ十分ではなかつた。この形態が個々の商會間の利害對立に依つて破壊されるといふことは、屢々見られた所である。斯くしてまた競争が恢復されることになつた。これがため、生産段階が斯くすることを許す迄に進んでゐる若干の營業部門に於いては、その全生産をば統一的指導の下に立つ一大株式會社に集中するといふ結果を來たした。これはアメリカに於いては既に幾度びか實現された所である。ヨーロッパに於いては、今日迄の所、合同アルカリ・トラストが最大の實例となつてゐる。このトラストは、イギリスに於ける全アルカリ生産を單一なる商會の手に集中せしめたものである。個々の工場(その數三十以上)の舊來の所有者たちは、彼等の總投資の評價價值をば株式の形で保有することになつた。その總計約五百萬磅、これは該トラストの固定資本を代表するものとなつてゐる。技術上の指揮は依然舊來の當事者の手に存してゐたが、營業上の指揮は總重役部の手に集中されることとなつた。約一百萬磅に及ぶ流通資本が公衆の間から募集された。そこで總資本は六百萬磅に達した譯である。斯くして全化學工業の基礎となつてゐるこの生産部門に於いては、イギリスでは獨占が競争に取つて代はり、總社會(國民)に依る將來の收奪は痛快に準備されることとなつた。——F.E.C.

これ即ち、資本制生産方法それ自身の内部に行はれる資本制生産方法の廢除(止揚)であり、自己否定的な一矛盾である。而して此矛盾が新たなる生産形態への單なる過渡段階として示されてゐるに過ぎない事は一見して明かである。それは現象の上にも亦、斯かる矛盾として示されてゐる。若干の生産部面に於いては、そのため獨占が成立し、かくして國家の干渉が要求されるやうになる。また發起人や、創立人や、有名無實な經營者などの形で、新たなる金融貴族

新たなる種類の寄生蟲たちが再生産され、會社の創立や、株式發行や、株式賣買などに關聯した詐偽購着の全制度が再生産されるやうになる。これ實に、私有の統制なき私的生産である。

IV 資本制度それ自身の基礎の上に立つて資本主義的の私産業を廢除し、且つみづから擴大されて新たなる生産部面に侵入すると同一の比例を以つて私産業を破壊してゆく株式制度のことは措いて問はないとしても、信用は個々の資本家なり又は資本家と見做される人なりの手に、他人の資本及び他人の所有、隨つて又他人の勞働に對する、一定の限界内に於いて絶對的な支配を與へるものである(八十八)。彼れは、自己所有の資本ではなく社會的資本に對する支配に依つて社會的勞働に對する支配を與へられる。信用といふ上部構造の基礎となつてゐるものは矢張り、人が現實的に所有するところの、又は所有するものとして世人に考へられるところの資本のみである。これは特に、社會的生産の大部分を其手に通過せしめるところの卸商業に就いて言ひ得ることである。資本制生産方法の内部に於いては尙ほ多かれ少なかれ正當とされてゐる一切の辯解理由、一切の尺度も、卸商業に於いては消滅してしまふ。投機的の卸商業者に依つて冒險されるところのものは、社會的の所有であつて、彼れ自身、所有ではない。資本の起原は貯蓄にありとする主張も亦、同様に馬鹿々々しいものとなる。彼れは正に、他人が彼れの爲に貯蓄せん事を要求してゐるかである。「最近、全フランスがパナマ運河詐偽師たちの爲に十五億フランを貯蓄した如きそれである。要するに全パナマ詐偽は、それが事實となつて現はれた滿二十年前、茲に正確な叙述を與へられてゐた譯である。——F.E.C.」いま一つの節慾論も亦、今やそれ自身信用の一手段となつてゐる彼れの奢侈に依つて、直接やり込められてゐる。

(八十八) 例へば『タイムズ』紙上で、或る恐慌の年(一八五七年の如き)の倒産者表を見、これらの倒産者の所有財産をば彼等の債務額と比較せよ。——『まことに、資本及び信用を有する人々の購買力は、投機市場に關し何等實際上の知識を有する

ことなき人々の考へ得る所を遙かに凌駕してゐるのである(「トック者『通貨原理の研究』第七三頁)。「順當な營業をなすに十分の資本を有してゐるとの聲價があり、且つ同業者間に適當の信用を有してゐる人が、若し其取引品の騰貴を樂觀的に見越して投機に著手し、而してその著手の當時及進行中に萬事具合よく進むとすれば、彼れは自己の資本に比して眞に莫大の買込をなす事が出来る(「前掲第一三六頁)。「製造業者や商人其他は、いづれも自己の資本を遙かに超過した取引をなしてゐる。……今日、資本は何等かの商營業に於ける取引の制限たるよりも、寧ろ良き信用を築き上げる基礎となつてゐるのである」(「ヒュノミスト」誌、一八四七年卷、第三三三頁)。

資本制生産の發達がそれほど進んで居らない一段階に於いては尙ほ或る意義を有してゐる諸種の觀念も、茲では全く無意義となつてしまふ。卸商業に於いては、成敗とも、資本の集中随つて又大規模の收奪を同時に招致することとなる。收奪は此場合、直接の生産者から始めて中小の資本家にも及ぶのである。この收奪は、資本制生産方法の起點となる。これが遂行は資本制生産方法の標的となるものであつて、終極に於いては一切個々人の手から生産機關が收奪されてしまふ。社會的生産の發達につれて、生産機關はもはや私生産の機關でも生産物でもなくなつてしまふ。それは結合生産者の社會的生産物である如く、また彼等の手に於ける生産機關たり彼等の社會的所有たり得るに過ぎなくなる。が、資本制度それ自身の内部に於いては、以上の收奪は少數者に依る社會的所有の占有といふ對立的な形態を採つて現はれる。而して信用は此等の少數者に、ます／＼純投機師たる性質を附與するものである。この場合、所有は株式の形態を採つて存するが故に、その運動及び移轉は、株式賭博の純結果となる。この賭博に於いては細魚は鯨に、小羊は狼に呑込まれてしまふのである。株式制度の下にも既に、社會的の生産機關を個人的所有として現はれしむる舊形態との對立が存在してゐるけれども、株式といふ形態への轉化は尙ほ資本主義的の制限に囚はれてゐる。即ちそれは、社會の富と私的の富といふ兩性質間の對立に打ち克つことなく、ただ之れを新たな形態に完成しゆく

に過ぎないのである。

労働者自身の協同組合的工場は、舊形態の内部に行はれる舊形態の最初の破壊を意味するものである。尤もそれが到る處、その現實的組織に於いて現存制度の一切の缺點を再生産してゐること、また再生産せねばならぬことは言ふ迄もない。が、資本と労働との對立は、この工場の内部に於いては廢除されてゐる。尤もそれは最初單に、労働者が組合として彼等自身の資本家であるといふ形で、換言すれば生産機關を彼等自身の労働の利用に充當せしめるといふ形で廢除されるに過ぎない。斯種の工場は、物質的生産力及びそれに照應せる社會的生産形態の發展が一定の段階に達したとき、如何にして一つの生産方法の中から自然に他の新たな生産方法が發展し形成されるやうになるかを示すものである。資本制生産方法に基く工場制度がなかつたとすれば、共同組合的の工場は發達し得なかつたであらうし、又この生産方法に基く信用制度がなかつたとした場合も同様であらう。この信用制度は、資本主義的の私企業を次第に資本主義的株式會社に轉化せしめる主要な基礎となると同様に、また共同組合的企業をば、次第に多かれ少なかれ國民的な規模に擴大しゆく所的手段となるものである。資本主義的の株式企業も、共同組合的の工場も、共に資本制生産方法から組合的生産方法に移りゆく過渡形態と見做すべきものであつて、ただ前者に於いては對立が消極的に廢除(止揚)されるに反し、後者に於いては積極的に廢除されるといふ一點が違ふだけである。

以上は主として産業資本の上から、信用制度の發達と、それに含まれる資本所有廢除の可能とを考察したものである。以下の諸章に於いては、更らにそれ自身としての利子附資本の上から信用を考察することにする。即ち信用が、此資本の上に如何なる効果を與へ、且つそれについて如何なる形態を探るかを考察しようとするのである。だが、これについては尙ほ、特殊經濟學的な若干の叙述を與へて置かねばならない。

その前に先づ、この事を述べて置きたい。即ち信用制度なるものは、過剰生産並びに商業上の過剰投機を促す主要槓杆として現はれるものであるが、それは蓋し、性質上伸縮自在なる再生産行程が、この場合強ひて最大極限まで擴大せしめられる結果に外ならないのである。而して何故斯様な擴大が行はれるかといへば、それは社会的資本の大きな部分がその非所有者に依つて充用されるからである。自己の私資本を有する者は、みづからこれを生産上に運用する場合、翼々としてその制限を考慮するのであるが、非所有者はそんなに大事をとらない。これはただ次の事實を論證するに過ぎない。即ち資本制生産の對立的性質に基く資本の價值増殖なるものは、一定の限點以上には現實的の自由な發展を許さないといふこと、隨つてこの價值増殖は實際に生産の内在的な桎梏となり制限となつてゐて、それが絶えず信用制度のために破壊されるといふこと、これである(八十九)。信用制度なるものは斯様にして、生産力の物質的發展と世界市場の成立とを促進する。此等の物の發展を新たな生産形態の物質的基礎として一定の程度に達せしむることは、これ實に資本制生産方法の歴史的任務となつてゐる所である。と、同時に又、信用は此矛盾の激烈な爆發を、恐慌を速かならしめ、かくして舊生産方法の分解を齎らす要素の發達を速かならしめる。

(八十九) トマス・チャーマーズ

信用制度には二重の性質が内在してゐる。それは一方に、資本制生産の發條たる、他人の労働の搾取を以つてする富の蓄積をば、最も純粹にして最も巨大なる賭博及詐偽の制度に發展せしめ、且つ社会的の富を壟斷する僅少者の數を益々制限せしめると同時に、他方には又、新たな生産方法への過渡形態となるものであつて、この二重性質こそ、ローよりエザック・ベレルに至る主なる信用宣傳者に、詐偽師と豫言者との氣持の良い混合性質を附與したものである。

第二十八章 流通要具及び資本。トック及びフライトンの見解

トック(九十)及ウ・ルソン其他の學者に依つて與へられた通貨對資本の區別は、貨幣としての、貨幣資本一般としての流通要具と、利子附資本(英語で謂ふ moneyed capital)としての流通要具との區別を、雜然混淆したものであつて、歸するところ、次の二點に關聯するものである。

(九十) 第五一三頁に拔萃したトックの當該文章を茲に原形のまま引抄して見る。——「要求拂約束手形の發行は暫らく措き、銀行業者の營業なるものは二つの部門に區分することが出来る。それはドクター「アダム」スミスの指摘した商人對商人間の取引と、商人對消費者間の取引との區別に一致するものである。即ち銀行業者の營業の一部門は、資本を直接に使用することのない人々の手から蒐集して、これを直接に使用する人々の手に分配又は移轉することであり、他の部門は、取引客の收入を預金として受け入れ、取引客が消費上の支出を要するところの金額を拂出すことに在る。……前者は資本の流通であり、後者は通貨の流通である」(トック著「通貨原理の研究」第三六頁)。前者は「一方に資本の集積であると同時に、他方に資本の分配であり、後者は其他の地方的目的に對してなす流通の處理である」(前掲第三七頁)。左に引抄したキニアの左の所論は、これに比べると遙かに正しい見解に近いものである。——「貨幣は本質的に相異つた二作用の爲に使用される。商人對商人間の交換要具として見れば、貨幣は資本の移轉をなさしめる機關である。語を換へていへば、貨幣としての一定額の資本が、商品としての同一額の資本と交換される。けれども貨幣の支拂や商人對消費者間の賣買に支出される貨幣は、資本ではなくて收入である。それは社會の收入中、日常の支出に使用される部分を代表するものである。この貨幣は日常の使用に間斷なく流通するものであつて、嚴密の意味で通貨と稱せられ得るものは、單にこの貨幣のみである。資本の前貨は、一に銀行又は其他の資本家の意

志に懸る。借受人の方は、いつでも見出されるからである。然るに通貨の高は、貨幣が日常支出の目的上流通してゐる社會の必要とするところ如何に懸るものである』(ジェー・ディー・キニア『恐慌及び通貨』ロンドン、一八四七年刊)。

流通要具なるものは一方に、収入の支出、随つて個人的消費者對小賣商人間の取引を媒介する限り、鑄貨(貨幣)として流通する。この小賣商人と謂ふ中には、消費者(生産的消費者たる生産者から區別して考へた個人的消費者)に販賣する一切の商人が含まれる。この場合には、貨幣は絶えず資本を回收せしめるとはいへ、鑄貨たる機能を以つて流通するのである。一國に於ける貨幣の一定部分は、絶えずこの機能に供せられる。尤もこの部分は、不斷に相變換されるところの個貨から成るものである。

反對に、購買要具(流通要具)としてなり、又は支拂要具としてなり、兎にかく資本の移轉を媒介する限り、貨幣は資本たるものである。随つて資本としての貨幣を鑄貨から區別する所のものは、購買要具としての機能でもなければ支拂要具としての機能でもない。蓋し商人對商人間の取引に於いても、彼等が相互に現金で購買し合ふ限り、貨幣は購買要具たる機能を盡し得るし、商人對消費者間の取引に於いても、信用が與へられて、先づ消費した後収入を拂出すといふ限り、貨幣は支拂要具たる機能を盡し得るからである。

要するに、この第二の場合に於いては、貨幣は單に一方の當事者たる販賣者にとつて資本の回收となるのみではなく、また他方の當事者たる購買者に依つても、資本として支出され前貸されるといふ點に區別が存してゐるものである。即ち問題は實際のところ、収入の貨幣形態と資本の貨幣形態との區別であつて、通貨と資本との區別ではない。蓋し一定量の貨幣部分は商人相互間の媒介要具としても、消費者對商人間の媒介要具としても、同様に流通するものであり、随つてそれは此等の兩機能の何づれに於いても等しく通貨たるからである。ところでトックの見解には、こ

の點に種々なる混亂が入り込んでゐる。即ち

(一) 機能上の區別を混同した點。

(二) 兩機能の何づれを以つても流通する貨幣の量に關する問題を混入せしめた點。

(三) 兩機能を以つて、随つてまた再生産行程の兩部分を通じて、流通する流通要具量相互の相對的比例に關する問題を混入せしめた點。

右の(一)、貨幣は一の形態に於いては通貨であり、他の形態に於いては資本であるといふ、機能上の區別を混同した點。収入の實現か、資本の移轉か、何づれかの機能に役立つ限り、貨幣は購買要具又は支拂要具として、更らに廣義に解釋すれば流通要具として、賣買上乃至は支拂上の機能を盡すものである。貨幣が其支出者なり受領者なりの計算に於いて、資本を代表するか、収入を代表するかといふ、更らに進んだ問題は、この點に何等の變化をも與へるものではない。而してこの事實も亦、二重の形に示される。

兩面に流通する貨幣種類は相異つたものであるとはいへ、同一の個貨(例へば五磅紙幣の如き)が一方の部面から他方の部面に移轉されて、交互に兩機能を盡す。これは、小賣商人といふものは購買客から受け取る鑄貨の形態を以つてのみ、その資本に貨幣形態を附與し得るに過ぎない、といふだけの理由からしても、すでに避け難い所となつてゐるのである。嚴密の意味の補助貨は、小賣商業の領域内に流通の重心を有つと假定し得る。小賣商人は釣錢の支拂用として絶えず補助貨を必要とするものであり、また購買客からの支拂に於いて絶えずそれを受け戻す。が、彼れは更らに貨幣、換言すれば價值尺度たる金屬で造つた鑄貨(イギリスでいへば五磅貨)をも受け、甚だしきは銀行券(特に五磅十磅といふ如き少額のもの)でさへをも受けるのである。此等の金貨や銀行券は、彼れの手に有り餘つた

だけの補助貨と共に、毎日又は毎週取引銀行に預託される。而して彼れは此銀行預金に對する小切手を以つて、購買上の支拂をするのである。だが又、此等の同じ金貨や銀行券は、消費者たる資格に立つた全公衆に依り絶えず其収入の貨幣形態として、直接又は間接に(例へば、工場主が賃銀の支拂に充用する小錢)銀行から引出されて、不斷に小賣商人の手へ回流してゆく。斯くしてそれは、小賣商人の資本の一部と同時に又、彼等の収入の一部をも新たに實現することとなる。この最後の事實は重要なものであつて、而もトックの全然氣づかなかつた所である。再生産行程の發端(第二卷、第一編)に於いて貨幣が貨幣資本として投ぜられる所にのみ、資本價值は純粹に資本價值として存在する。蓋し生産された商品の中には、單に資本が含まれるのみではなく、また餘剩價值も含まれてゐるからである。即ち生産された商品は單に資本それ自體たるのみではなく、また既に生成したる資本でもあり、収入の源泉を以つて合體せしめられてゐる所の資本でもある。されば小賣商人が自己の手に回流して來る貨幣に換へて引渡す所の物、即ち彼れの商品は、彼れにとつては資本プラス利潤であり、資本プラス収入である。

が、更らに、流通貨幣は小賣商人の手に回流することに依つて、彼れの資本の貨幣形態を回復せしめるものである。それ故、収入の流通としての流通と資本の流通としての流通との區別を以つて、通貨對資本間の區別に轉化せしめることは、全くの錯誤である。トックがこの通貨對資本間の區別といふ言ひ方をするやうになつたのは、彼れが單純にそれ自身の銀行券を發行する銀行業者の立場に身を置いて考へてゐるからである。常に相異つた銀行券から成るとはいへ、兎にかく絶えず公衆の手に存して流通要具たる機能を盡す彼れの銀行券の高は、紙と印刷とを除く以外彼れにとつて何ものをも要しない。それは彼れ自身に宛てて發行された債務證券(爲替手形)たるものである。けれどもそれは彼れの手に貨幣を齎らすものであつて、彼れの資本の價值増殖要具として役立つこととなるのである。が、それ

は、彼れの資本(彼れ自身の所有資本たる借受資本たるを問はない)とは相異なるものである。斯様にして彼れは、通貨對資本間の特殊的區別を説くやうになつたのであるが、この區別は概念決定それ自身、殊に彼れの與へた概念決定とは、何等關係する所がないのである。

貨幣が収入の貨幣形態たる機能を盡すにしろ、又は資本の貨幣形態たる機能を盡すにしろ、兎にかく此等の機能上の差異は、先づ流通要具としての貨幣の性質を些かも變ぜしめることがない。何づれの機能を盡すにしろ、貨幣はこの性質を保持してゐる。勿論、収入の貨幣形態となる場合には、嚴密の意味の流通要具(鑄貨、購買要具)たる機能を盡すことがヨリ著しいのであるが、これは、購買及び販賣がおの／＼分散されて居り、且つ収入を支出する人々の大多數を占める所の労働者にとつて、信用買をなし得ることが比較的稀有となつてゐる結果である。然るに、流通要具が資本の貨幣形態となつてゐる商業界の取引に於いては、一部分は集積の結果、一部分は又信用制度が支配的に行はれてゐる結果、貨幣は主として支拂要具たる機能を盡すことになる。けれども支拂要具としての貨幣と購買要具(流通要具)としての貨幣との區別は、貨幣それ自身に關する區別であつて、貨幣對資本間の區別ではない。小賣商業に於いては銅及び銀がヨリ多く流通し、卸賣商業に於いては金がヨリ多く流通するのであるから、一方の銀及び銅と他方の金との區別が問題となるのであつて、通貨對資本間の區別は問題とならないのである。

右の(二)、兩機能の何づれを以つても流通する貨幣の量に關する問題を混入せしめた點。購買要具としてにしろ、支拂要具としてにしろ、兎にかく貨幣が流通する限り、兩面の何づれに於いて流通するか、又その機能が収入を實現するに在るか資本を實現するに在るかを問はず、流通貨幣量については、曩に單純なる商品流通を、察せる際(第一卷、第三章、第二節、b)展開した所の諸法則が適用される。流通の速度、換言すれば同一の個貨が、與へられた

る期間中に購買要具及び支拂要具として同一の機能を反復する度数、及び同時に行はれる賣買又は支拂の量、流通商品の價格總高、最後に又、同一期間に清算さるべき支拂總高等——これらの要素は、右何づれの場合に於いても流通貨幣(通貨)の量を決定する。斯かる機能を盡す貨幣が、支拂者側又は受領者側にとつて資本を代表するか、収入を表するかといふことは、何づれにしても關係する所がなく、問題の上に何等の變化をも與へない。この貨幣の量は、單純にそれが購買要具及び支拂要具として盡す機能に依つて決定される。

右の(三)、兩機能を以つて、隨つてまた再生産行程の兩部面を通じて、流通する流通要具量相互の相對的比例に關する問題を混入せしめた點。流通の兩部面は内部的に相互關聯してゐる。蓋し一方に於いて、支出すべき収入の量は消費の範圍を言ひ現はし、他方に於いて、生産上及び商業上に流通する資本量の大小は、再生産行程の範圍及び速度を言ひ現はすからである。それにも拘らず、兩機能を以つて、又は兩部面に互つて流通する貨幣の量(又はイギリス人の銀行用語に従つて言へば、通貨の量)に對し同一の事情が及ぼす所の影響は相異なるものであつて、反對の方向に作用することさへある。而して此事實は又、トックの與へた通貨對資本間の不合理な區別に新たな誘因を附與するものである。通貨説の先生たちが二つの相異つた事物を混同したといふ事實は、此等の事物を概念上の區別たらしめる理由には決してならないのである。

營業振興期となつて、再生産行程が著しく擴大され、その速度とエネルギーとが増進した時期に於いては、勞働者は手一杯に雇傭される。勞銀も多くは増騰して、商業循環の他の各時期に行はれる所の、平均的水準以下への低落を或る程度まで補償する事になるのである。それと同時に資本の収入も著しく増大する。消費は一般に増進して來る。商品價格も亦、少なくとも決定的な諸種の營業部門に於いては、昂騰することを常則とする。その結果、流通貨幣の

量は、少なくとも一定の限界内に於いては増大して來る。これ蓋し流通の速度が増進して、流通要具の量に制限を附するが故である。社會的収入中の勞銀から成る部分は、本來、産業資本家が可變資本家として、又つねに貨幣形態を以つて、前貸する所のものであるから、營業振興期には彼れは流通上にヨリ多くの貨幣を要する譯である。だが、これを二度計算すべきではない。即ち一度は可變資本の流通に必要な貨幣として、次には勞働者の収入の流通に必要な貨幣として計算すべきではない。賃銀として勞働者に支拂はれた貨幣は、小取引の上に支出され、諸種の小循環に於いて尙ほ様々の中間營業を媒介した後、殆んど一週毎に小賣商人の預金として銀行へ戻つて來る。營業振興期には、産業資本家にとつて貨幣の回流は圓滑に進展する。されば彼等がヨリ多くの勞銀を支拂はねばならず、可變資本の流通にヨリ多くの貨幣を要するからと言つて、これがため彼等がヨリ多くの金融を必要とするに至るものではない。

要するに、營業振興期には、収入の支出に役立つ流通要具の量が確實に増大するといふ事が總結論となるのである。次に、資本の移轉に必要な、隨つて資本家自身の間にのみ必要な流通に就いては、斯様な營業活潑の時期は、同時に又信用が最も伸縮自在で最も容易なる時期となつてゐる。資本家對資本家間の流通の速度は、直接、信用に依つて調節される。隨つて、支拂の清算に要する流通要具は固より、現金購買に要する流通要具の量も、相對的には減少して來る。それは絶對的には増大し得るが、相對的には(即ち再生産行程の膨脹に比較すれば)如何なる事情の下にも減少することになる。一方にはヨリ多額の支拂が貨幣の介在なくして清算され、他方には行程の活氣が大となる結果、同一量の貨幣が購買要具並びに支拂要具として遂げる運動はヨリ急速となつて來る。即ち同一量の貨幣がヨリ多數の個別的資本を回流せしめることになるのである。

斯かる時期には、貨幣流通は概して手一杯に充たされたものとして現はれる。尤も、その第一部分(収入の支出)

は絶対的に擴大されるのであるが、第二部分の方(資本の移轉)は少なくとも相對的には縮小される。

回流とは商品資本の貨幣への再轉化、即ちC—M—C、を言ひ現はすことは、第二卷第一編で再生産行程を考察せる際述べた通りである。産業資本家にとつても、商人にとつても、貨幣形態を以つてする回流は信用のため現實的な回流の時期から獨立したものとされる。彼等は何づれも信用販賣(掛け賣)する。即ち彼等の商品は、それが貨幣に再轉化され貨幣の形で彼等自身の手に戻流する以前に、手放されるのである。他方に又彼等は信用購買(掛け買)する。即ち彼等の商品の價值は、それが現實に於いて貨幣に轉化される以前、換言すれば支拂期日が到來して商品價格が支拂はれる以前、既に生産資本なり商品資本なりに再轉化されてゐるのである。斯かる營業振興期には、回流は輕易に且つ圓滑に進展する。小賣商人は卸賣商人に、卸賣商人は製造業者に、製造業者は又原料の輸入業者に、等、等、それら副抵當を以つて支拂ふ。急速確實なる回流の外観は、その現實性が過ぎ去つた後にも尙久しく、一旦開始された信用に依つて維持される。信用上の回流は現實的回流を代表するからである。取引客が貨幣よりも爲替手形の方を多く拂込むやうになるや否や、銀行は危険を嗅ぎつけ始める。曩に掲げたリヴァプール銀行重役の供述を見よ(第五二八頁)。

尙ほ茲に、嘗て私の述べた所を挿入して置く。——『信用が支配的に行はれる時代には、貨幣流通の速度は商品の價格よりも急速に増大する。然るに信用が減退するにつれて、商品の價格は流通の速度よりも緩漫に低減するのである』(『經濟學批判』一八五九年刊、第八三—八四頁)。

恐慌期に於いては、反對である。即ち流通第一號は收縮して、價格は低落し、勞銀も同様に低落する。就業勞働者の數は制限され、取引の量は減少して来る。反對に流通第二號に於いては、信用が減退するにつれて、金融を要することが著しくなつて来る。この點に就いては、聽て立ち入つた考察を與へるであらう。

信用の減退は再生産行程の停滯と相共に行はれるものであつて、信用が斯く減退したとき、第一號(收入の支出)に要する流通量は減少し、第二號(資本移轉)に要する流通量が増大することは、毫も疑を容れない所である。けれども此命題が、フラートン其他に依つて提出された左の命題と如何なる程度まで相一致するかは、尙ほ攻究を要する所である。——『貸附資本に對する需要と追加流通要具に對する需要とは、全く相異つた事項であつて、兩者が相結合して存在することは、屢々見出されるものではない』(九十一)。

(九十一) フラートン前掲第八二頁、第五章標題、『金融(換言すれば資本貸附)に對する需要が、追加流通要具に對する需要と相一致するかの如く想像し、甚だしきは兩者が屢々結合して存在するかの如く想像することは、實際に大きな誤りである。此等の需要はおのづから、それ自身の上に特殊の影響ある事情に胚胎するものであつて、著しく相異なつてゐる。總べてが順調に見え、賃銀が高く、物價が昂騰に向ひ、工場が繁忙なる時——斯かる時にこそ、ヨリ多額、ヨリ多數の支拂をなすべき必要から不可分の諸種の追加機能をなすため、通貨の追加供給を要するに至る事を常とするものである。然るに市場が荷嵩みとなり、回收が遅滞し、利子が昂騰し、資本の前貸に就いてイングランド銀行の上に壓迫が生ずる等、諸種の困難が現はれ始めるのは、主として商業循環上のヨリ進んだ段階に入つてから後のことである。約束手形に依るの外、他にイングランド銀行が資本前貸をなすことを常としてゐる何等の媒介も存せず、隨つて約束手形を拒絶するは、これ即ち金融を拒絶するに等しくなることは事實である。けれども金融が一度び與へられたとすれば、萬事はそれ自身、市場の必要に調和してゆく。貸附は存続し、不用の通貨は發行者の手に復歸する。それ故、議會の報告を極めて輕々に檢べただけでも、次の事實を納得ることが出来る。即ちイングランド銀行の手にある有價證券は、流通と一致した方向よりも寧ろ反對の方向にヨリ屢々變動するものであるから、此大なる銀行の實例は決して、銀行券通貨を以つて通常處辨される目的に對して流通が既に十分存在してゐるとすれば、如何なる銀行も流通を擴大し得るものでないといふ、地方銀行業者たちが手強く主張する所説の例外となるものではないといふこと、然し又、この制限が過ぎ去つてしまふと、前貸に對する如何なる追加も資本の中から爲されねばならず、準備

してある有價證券の若干部分を賣却するなり、又は有價證券への更らに夫れ以上の投資を控へ目にするなりして、之れを供給しなければならぬといふこと。曩の或る頁に参照した、一八三三年から一八四〇年に至る議會報告に基いて編纂した表は、この眞理に就いての連續的な實例を供給するものである。此等の實例の中には、看過すべからざる極めて顯著な二つの事實がある。その一、信用を維持し金融市場の困難に對應するためイングランド銀行の財源が極度に緊張せしめられた一八三七年一月三日、同銀行の貸附及び割引上の前貸は一千七百二萬二千磅といふ戰爭以來殆んど知られない所の巨額に達してゐた。これは發行總額に殆んど比敵するものであつて、後者は當時一千七百七萬六千磅といふ低い水準に止められてゐたのである。その二、一八三三年六月四日の流通高は一千八百八十九萬二千磅であつた。この中、私的有價證券の形で保有された額は、過去半世紀間に於ける最低レコードではないにしろ、兎にかく九十七萬二千磅を超えなかつたのである〔フライトン前掲、第九七一―八九頁〕。金融の需要は決して金（ウキルソンヤトック其他の學者が資本と呼んでゐる所のもの）の需要と一致するを要しない事は、イングランド銀行總裁ウエグエリンの左記供述に依つて知られる所である。――『この金額（日々一百万磅當り連續的に三日間）までの手形割引は、ヨリ多額の現實的流通が公衆に依つて要求せられたいとすれば、準備金（銀行券の）を收縮せしめることにはないであらう。手形割引上に發行された銀行券は、銀行を介し預金を通して回流し來たるであらう。斯かる取引が金の輸出を目的とするものでないか、又は國內に恐慌が行はれてゐるため、公衆が銀行券を銀行に預託しないで自己の手に保有するやうになるといふ結果を來たさないとすれば、準備金はこの莫大な取引に依つて影響されることはないであらう。』――『イングランド銀行は日々一百万磅の割引をなすことが出来る。而してこれは、同銀行の準備金に些かも影響する所なくして、連續的に行はれる所である。銀行券は預金として復歸する。而して生じ來たる唯一の變化は、一つの計算から他の計算への移轉といふことに過ぎない』（銀行條例報告、一八五七年、證述第二四一五〇〇號）。要するに、銀行券なるものは此場合、信用移轉の要具として役立つに過ぎないのである。

先づ、以上の兩場合中、前者に於いては、流通煤具の量が増大せねばならぬ營業振興期に、その需要も亦増大する

ことは明かである。だが又、斯ういふことも明かである。それは一つの製造業者が貨幣の形でヨリ多くの資本を支出せねばならなくなつた結果、銀行の預金中からヨリ多くを金又は銀行券の形で引出すに至つたとしても、これがため資本に對する彼れの需要が増大した譯ではなく、寧ろ彼れが其資本を支出するについての斯くの如き特殊形態に對する彼れの需要が増大したに過ぎないといふことである。需要はただ、彼れが其資本を流通に投する技術的形態に關係するだけである。例へば、信用制度の發達が相異なるとき、同一量の可變資本即ち同一量の勞銀を以つてしても、一の國に於いては他の國に於けるよりも多量の流通要具を要することになる。實例を擧ぐれば、イングランドに於いてはスコットランドに於けるよりもヨリ多量を要し、ドイツに於いてはイングランドに於けるよりもヨリ多量を要する如くである。同様に、農業上に於いても、再生産行程の上に活動する同一の資本が、相異つた季節には其機能の遂行上相異つた貨幣量を必要とする。

けれどもフライトンの與へた對立は當を得て居らない。營業沈滞の時期を營業振興の時期から區別するものは、決して彼れの謂ふ如く、貸附に對する強烈な需要に在るのではなく、寧ろ、營業振興期には此需要が容易に充たされ、沈滞に入つた後は之れを充たすことが困難になるといふ事實である。營業振興期中には信用制度が異常なる發達を遂げて、貸附資本の需要も非常に増大し、且つ供給も、進んでこれに應ずることとなるのであるが、斯かる事實こそ正に、沈衰期に當つて信用の缺乏を齎らす所の原因となる。されば此等兩期の特徴となるものは、貸附に對する需要の大きさの區別ではないのである。

曩にも述べた如く、此等の兩期は、先づ左の事實に依つて區別される。即ち營業振興期には、消費者對商人間の流通要具の需要が主勢を占め、反動期には、資商家相互間の流通要具の需要が主勢を占めるといふ事がそれである。營

業沈滞の時期には、右の第一の需要が減退し、第二の需要が増進して来る。

さて、フライトン其他の學者にとり、決定的に重要な事實として注意を惹いたものは、イングランド銀行の手にある有價證券(副抵當³及び爲替手形)が増大する如き時期に在つては、その銀行券流通が減少し、また反對の場合には反對の結果を生ずるといふ現象であつた。が、有價證券の大小は、金融の大小を、割引手形と通用し得べき有價證券に對して與へられる前貸との大小を言ひ現はすものである。そこでフライトンは、本篇註九十一(第五七九頁)に引抄した文章の中に述べて曰く、イングランド銀行の手に在る有價證券は、大抵みなその銀行券流通とは反對の方向に變化するものであつて、この事實こそ即ち、個人銀行に依つて久しく支持されて來た主張——如何なる銀行も公衆の必要に依つて決定される所の一定額以上に銀行券の發行高を増大し得るものではなく、これ以上の前貸をなさんとすれば、自己の資本の中からなすべきであり、隨つて有價證券を實現するか、又は他の場合有價證券に投ずるであらう所の預金を充用せねばならぬといふ主張——を確證するものであると。

だが又茲に、フライトンが如何なるものを資本と解してゐるかが示されてゐる。茲に資本と謂はれてゐるのは、如何なるものであるか？ 銀行はもはや、自己の銀行券を以つてしては、自己にとつては勿論何物をも要しない所の支拂約束を以つてしては、前貸をなすことがないといふ事實が即ちそれである。斯かる場合には、何を以つて前貸するか？ 準備有價證券たる國債券や株式その他の利子附證券を賣却することに依つて實現した貨幣を以つて。だが、此等の有價證券は何を得る爲に賣却されるか？ 貨幣たる金又は銀行券(それがイングランド銀行券の如く法定支拂要具となつてゐる限りは)を得んが爲である。それ故、銀行に依つて前貸される所のは、如何なる事情の下にも貨幣であるといふことになる。ただ此貨幣は、今や銀行の資本の一部を構成するものとなるのである。銀行が金を前貸

する場合に、これは分明となつて来る。若し銀行券を前貸するとすれば、此等の銀行券は資本を代表するものとなる。なぜならば、銀行はこれが爲に現實的の一價値を、利子附證券を讓渡したからである。個人銀行について言へば、有價證券の賣却に依つて得る銀行券は、量の上から見てイングランド銀行又は自銀行の發行に係るもの以外ではあり得ない。他の銀行券では、有價證券の代價として受け容れられ難いからである。けれどもイングランド銀行それ自身について言ふ場合には、その手に戻つて來る自己の銀行券は、同銀行にとつて資本を要し、利子附證券を要する。しかのみならず、これがため自己の銀行券を流通の内部から引上げることにもなるのである。それ故、若し同一の銀行券が再發行されるか、又はそれに代へて等額の新たな銀行券が發行されるとすれば、此等の銀行券は今や資本を代表するものとなる。これ恰も、同一の銀行券が資本家に對する前貸に利用される場合、又は後ちに及んで、斯かる金融の需要が減退したとき、有價證券への新たな投資に利用される場合、資本を代表する如くである。此等一切の場合を通じて、資本といふ言葉は、茲では銀行業者の謂ふ意味にのみ使用されてゐる。即ち銀行業者は、單なる信用の程度を超えず貸附をなすことを餘儀なくされるといふのである。

イングランド銀行がそれ自身の銀行券を以つて一切の前貸をなすことは、人の知る所である。だが、それにも拘らず、この銀行券の流通が若し、同銀行の手にある割引した爲替手形や副抵當が増大して、その前貸が増大するやうになるのと同じ比例で、減少することを常とするとすれば——流通内に投ぜられた銀行券は何となつてしまふであらうか？ それは如何にして、同銀行の手に回流して來るであらうか？

先づ、一國の貿易差額が逆となつた爲に金融の需要を來たして、金の流出を促すやうになつた場合については、問題は極めて單純である。爲替手形は銀行券を以つて割引される。銀行券はイングランド銀行それ自身の發行部に於い

て金と交換され、而してこの金が輸出される。これ恰も、銀行券の媒介なくして、手形割引の際に直接金を支拂ふ如くである。斯かる需要の増大は、七百萬磅乃至八百萬磅に及ぶ場合があるけれども、國內流通に五磅券一枚でも追加するものでないことは言ふ迄もない。

ところで若し、イングランド銀行は此場合資本を前貸するのであつて、流通要具を前貸するのではないと言はれたとすれば、之れには二重の意味が含まれてゐる。第一に、イングランド銀行に依つて前貸されるものは、信用ではなくて現實的の價值であり、自己所有の資本か又は預託された資本かの一部であるといふこと、第二に、同銀行が貨幣を前貸するのは國內流通の爲ではなく、國際的流通の爲であつて、世界貨幣としてこれを前貸するといふこと。而して此目的のため、貨幣は常に退藏貨幣の形を以つて、金屬的の現身を以つて、存在せねばならない。この形態に於ける貨幣は、單に價値の形態たるのみではなく、又それが貨幣形態となつてゐる所の價値それ自身に等しいのである。ところでこの金は銀行にとつても、金の輸出營業者にとつても、資本(銀行資本又は商人資本)を代表するとはいへ、その需要は資本の需要として生ずるものではなく、貨幣資本の絶對的形態に對する需要として生ずる。それは、國外市場が實現不可能なるイギリスの商品資本を以つて充滿してゐる丁度その瞬間に生じて来る。されば要求される所のもは資本としての資本ではなく貨幣としての資本であり、貨幣が一般的世界市場商品として存在してゐる所の形態を採つた資本であるといふことになる。而してこれ、貴金屬としての貨幣の本來の形態たるものである。されば、金の流出といふことは、フラートンやトックなどの主張する如き、單なる資本問題ではない。それは貨幣の問題である。尤も貨幣とはいつても、特殊の一機能に於ける貨幣を謂ふのである。金の流出が、通貨説の論者に依つて主張せられる如き國內流通の問題でないといふことは、決して、それがフラートン其他の考へてゐる如き、單なる資本問題だといふことを示すものではない。それは寧ろ、貨幣を國際的支拂要具たらしめる所の形態を採つた貨幣の問題である。

「右の資本(國內の不作後に輸入される外國産小麥數百萬クォーターの購買價格)が商品の形で移送されるか、正金として移送されるかといふことは、取引の性質には何等影響する所のない問題である」(前掲第一三二頁)。けれどもそれは、金の流出が行はれるか否かといふ問題に對しては、極めて著しく影響するのである。資本は貴金屬の形で移送される。商品の形では全く移送され得ないか、又はされ得るにしても、非常なる損失なくしてはされ得ないからである。近世の銀行制度が金の流出に就いて抱いてゐる所の不安は、貴金屬を以つて唯一の眞の富なりとする貨幣制度が嘗て夢想した所の一切を凌駕してゐる。

一八四七乃至四八年の恐慌に關する議會委員がイングランド銀行總裁モリスに對してなした左の審問を、一例に採らう。——(第三八四六號)問「在庫品及び固定資本の價値低落に就いて語る時、一切種類の證券及び生産物に投ぜられた全資本の價値も亦同様に低落し、これがため原料たる棉花や絹や羊毛が同じ捨値で大陸に送り出され、砂糖や珈琲や茶が強制販賣を以つてする如くに糶賣されたことは、貴下の知る所ではないか?」答「生活資料の莫大なる輸入に基づく金の流出を制止するため、國民が著しき犠牲を拂ふべきことは、避け難い所であつた。」——(第三八四八號)問「斯様な犠牲を以つて金の回収に努めるよりは、寧ろイングランド銀行の地窖内に保有せられてゐる八百萬磅を流用した方が宜しいと、貴下は信じないか?」答「左様には信じない。」——この場合、唯一の眞の富とされてゐる所のものは、即ち金である。

「僅か一二の場合(それも満足的な説明を許すものであるか)を除外して考へるならば、最近半世紀間に於ける金の流出を伴つた交換の著しき減退は、いづれもみな流通要具の比較的低位なる状態と相一致するものであり、これと反

對の場合には反對の結果を見たのである』といふトックの發見を、フライトンは引抄してゐるが(フライトン前掲第一二頁)、この發見は實に左の事實を論證するものである。即ち斯くの如き金流出は大抵みな、激動と投機の間が過ぎ去つた後、『既に開始されてゐる營業崩落の信號として……市場は荷嵩みとなり、我が生産物に對する外國の需要は杜絶し、回収は遲滞し、且つ此等一切現象の必然的結果として商業上の信用は失墜し、マニユファクチュア場は閉鎖され、職人は飢餓に瀕し、産業及び企業は一般に沈滞を來たすやうになる徴候として(第一二九頁)生ずるといふことがそれである。同時に又それは、充實したる流通は地金銀を驅逐し、低微なる流通は地金銀を牽引するといふ、通貨論者の主張に對する最良の反駁ともなることは言ふ迄もない。他方に又、イングランド銀行の大なる金準備は、多くは營業振興期に存在してゐるとはいへ、この退藏金の形成は常に、激動に次いで來たる所の、生氣なき沈滞期中に行はれるものである。

要するに、金の流出に關するこの全智慧は、畢竟するところ次の主張に歸する。即ち國際的の流通要具及び支拂要具に對する需要は、國內的の流通要具及び支拂要具に對する需要とは相異なるものであり(此主張は又おのづから、フライトンが前掲第一二二頁に述べてゐる如き『流出の存在は、必ずしも流通に對する國內需要の減退を意味するものでない』といふ結論を生ぜしめる)、而して貴金屬を國外に送り出して國際的流通に投げ入れることは、銀行券又は鑄貨を國內流通に投げ入れることと相等しきものでないといふ主張、これである。

尙また、國際的支拂上の準備金として集積された退藏貨幣の運動は、それ自身に於いては流通要具としての貨幣の運動と何等關係する所がないことは、曩に述べた通りである。勿論、私が貨幣の性質から展開した退藏貨幣の種々な機能(國內の満期支拂に支拂要具として充用すべき準備金たる機能、流通要具の準備金たる機能、最後に世界貨幣

の準備金たる機能)が、唯一つの準備金に負擔せしめられる結果、問題が錯綜して來ることは事實である。而して此事實から又、一定事情の下に、イングランド銀行の金の國內市場への流出は、國外市場への流出と相伴ひ得るといふ結論が生じて來る。また、信用制度及び信用貨幣の發達した國々に於いては、銀行券兌換の保證準備たるべき追加機能が、全く專擅的に、この退藏貨幣に負擔せしめられるやうになる事のため、問題は更らに錯綜して來る。加ふるに尙(一)唯一の首腦銀行に國民的準備金が集中されて、(二)それが出来る限りの最低限まで節減されるといふ事實が、最後に控へてゐる。其處から、フライトンの斯ういふ怨嗟が生じて來た。『ヨーロッパ大陸諸國に於ける交換の變化は、完全なる靜謐と輕快とを以つて過ぎ去つてしまふことを常とするものであるが、いま此事實をば、銀行の準備金が多少でも枯渴に近づきつつある如く見える時にはつねに熱病的の不安と警戒とを醸すといふ、イギリスの事實と比較するならば、金屬通貨なるものが此點に於いて非常なる利益を有してゐることを感ぜずには居られないのである(第一四三頁)』

だが、若し金の流出を措いて問はないとすれば、銀行券を發行する銀行(例へばイングランド銀行の如き)は、如何にしてその銀行券の發行を増大せずして、引き受ける所の金融高を増大し得るであらうか。

銀行の外部に在る一切の銀行券は、流通しつつあるものと、私人の退藏中に休眠しつつあるものとを問はず、銀行それ自身について言へば、流通の内部に、換言すれば銀行の所有の外部に存在するものである。そこで若し、銀行が其割引や動産抵當貸附上の營業を、約して言へば諸種の抵當附前貸を擴大したとすれば、此目的のために發行した銀行券は銀行の手に回流して來なければならぬ。然らずんば、此等の銀行券は流通の高を膨脹せしめることになるであらう。斯様な結果に到らしむべきではない。而して右の回流は二様に行はれる得る。

第一に、銀行は有價證券に對してAなる人に銀行券を支拂ふ。Aはこの銀行券を以つて、Bに満期手形の支拂をなし、Bはこの銀行券を又同じ銀行に預託する。この銀行券の流通は、これで終焉を告げることになるが、貸附は存続する。(貸附は存続し、而して通貨は必要とされなければ發行者の手に戻つて来る) (フライトン前掲、第九七頁) 銀行がAに前貸した銀行券は、今や銀行の手に復歸したのである。けれども銀行は依然として、Aなり、又はAに依つて割引された爲替手形の支拂人なりに對する債權者であり、此等の銀行券に言ひ現はされた價值高だけBに對する債務者となつてゐる。Bはそれだけ、銀行の資本部分を支配してゐる譯である。

第二に、AはBに支拂ひ、而してB自身、若しくはBから更らに同じ銀行券の支拂を受けたCは、直接又は間接に同じ銀行券を以つて銀行に満期手形の支拂をする。この場合には、銀行は自己の銀行券を以つて支拂はれた譯である。これで取引は(Aから銀行に再支拂される場合を除き)完了したことになる。

然らば、Aに對する銀行の前貸は、如何なる範圍まで資本の前貸と見るべきであり、如何なる範圍まで單なる支拂要具の前貸と見るべきであるか? (九十二)。

(九十二) これに續く原稿中の叙述は前後の脈絡が取れて居らない故、編輯者の手で書き換へて括弧の中に納めた。この點は既に他の方面と關聯して第二十六章に論及した。

これは前貸それ自身の性質に懸る。それに就いて、三つの場合を研究すべきである。

第一——Aが何等の擔保をも提供することなく、對人信用に基いて銀行から前貸を受ける場合。この場合には、彼は單に支拂要具の前貸を受けるのみでなく、また確かに新たなる一資本の前貸をも受ける譯であつて、彼れはこれを返済するまで追加資本として自己の營業に使用し利用することが出来る。

第二——Aが有價證券たる國債券又は株券を銀行に擔保として提供し、それに對して、例へば時價の三分の二以内といふ如き範圍で現金前貸を受ける場合。この場合には、彼れは必要とする支拂要具を受けるとはいへ、追加資本を受けたことにはならない。蓋し彼れは銀行から與へられる所よりも多大の資本價值を、銀行の手に提供したからである。だが、一方に於いて、この多大の資本價值は、一定の形態に於ける利子附資本として投ぜられたものであるから、彼れの瞬間的欲望の爲に之れを支拂要具として使用することは不可能である。他方に又、Aはこの資本價值を販賣することに依つて直接支拂要具に轉化するといふことをしなない理由を有つてゐる。彼れの有價證券は準備資本たる機能を盡すべき使命を殊に有してゐるのであつて、彼れはそれを斯かるものとして作用せしめる。それ故、Aと銀行との間には、資本の一時的な相互移轉が行はれ、Aは何等の追加資本をも受けないが(寧ろ反對だ!) 必要なる支拂要具は受ける譯である。他方に銀行の立場から見れば、この取引は貨幣資本を暫行的に貸附といふ形態に固定せしむることであり、貨幣資本を一つの形態から他の形態に轉化せしむることである。而して此轉化こそ正に、銀行營業なるものの本質的機能となつてゐるのである。

第三——Aが銀行で手形の割引をして貰ひ、割引料を控除した殘額を現金で支拂はれる場合。この場合には、彼れは非流動的な形態の貨幣資本を銀行に販賣して、流動的な形態の價值高を銀行から受ける。換言すれば、通用手形を販賣して現金を得る譯である。手形は今や銀行の所有に歸する。手形の支拂なき場合には、最後の裏書人たるAが銀行に對して其價值高だけの責任を負ふのであるが、これは問題の上に些かの變化をも與へない。Aは此責任を他の裏書人及び振出人との間に分擔し、此等の人々は又Aに對して責任を負ふ。されば、この場合には何等の前貸も行はれないで、全く通例の賣買が行はれるに過ぎない。隨つてAは銀行に何物をも返済するを要せず、銀行は期日の到來し

た場合手形を正金に換へて補償を得る。この場合にも亦、Aと銀行との間には資本の相互移轉が行はれること、他の總べての商品の賣買に於けると毫も異ならない。さればこそ、Aは何等の追加資本をも受けなかつたことになるのである。彼れが要する所のもの、彼れが受ける所のものは、支拂要具である。彼れは銀行をして、彼れの貨幣資本の形態たる爲替手形をば、他の形態たる貨幣に轉化せしめ、以つてこの支拂要具を受けるのである。

されば現實的の資本前貸なるものは、上記第一の場合についてのみ言ひ得ることであつて、第二及第三の場合は高、如何なる投資も『資本前貸』を含むといふ意味で問題となるに過ぎない。この意味では、銀行がAに貨幣資本を前貸することは事實である。然しAから見れば、それは高々、彼れの資本一般の一部であるとの意味に於いて貨幣資本たるに過ぎない。而して彼れはそれを、特に資本としてではなく、寧ろ特に支拂要具として要求し使用するのである。然らずんば、支拂要具を確保せしむる通例の各商品販賣も亦、資本前貸を受くるものと見做し得ることになるであらう。——F.E.』

銀行券を發行する個人銀行には、斯ういふ區別が存してゐる。即ちその銀行券が地方的流通内に止まることもなく、又は預金としてなり、満期手形の支拂を通してなり、いづれにせよ銀行それ自身の手で復歸することもないとすれば、この銀行券は個人銀行が金又はイングランド銀行券を以つて之れを兌換せねばならない人々の手に歸する。この場合には、個人銀行券の前貸は實際のところ、イングランド銀行券の前貸、又は個人銀行にとつては畢竟同じ事に歸するが、銀行資本の一部たる金の前貸を代表することになる。イングランド銀行それ自身か、又は銀行券發行の法定最高限界に服する他の何等かの銀行かが、自己の銀行券を流通から引き上げ、然る後ち更らに前貸のため再發行する目的を以つて、有價證券を販賣せねばならないといふ場合に就いても、矢張り同一の事が言ひ得る。この場合には、これ

らの銀行それ自身の銀行券は彼等の出動銀行資本の一部を代表することになる。

流通が純金屬的であるとしても、(一)金の流出(この場合には、少なくとも一部分だけは外國に向ふ所の金流出を謂つてゐることは明かである。——F.E.』は退藏庫を空虚になし得るであらうと同時に、(二)金は主として過去に於ける取引の支拂残高を清算する爲に要求されるものであるから、有價證券を擔保とする前貸は極めて増大するとしても、結局は預金としてなり、又は満期手形の支拂を通してなり、同じ銀行の手に復歸し得ることになるであらう。これがため、一方には、銀行の手に在る有價證券が増大するとき、その退藏貨幣の總額は減少し、他方に又、銀行は従前みづから所有者として保持してゐた貨幣額をば、今や預金客の債務者として保有することになり、流通要具の總量は結局減少することになるであらう。

以上の説明に於いては、前貸は銀行券を以つてされ、これがため銀行券の發行は總て恢復するとはいへ少くとも瞬間的には増大するものと假定した。けれども斯く假定することを要する譯ではない。銀行は紙券を發行することの代りとして、Aに對し帳簿上の信用を開始することが出来る。この場合には、銀行の債務者たるAは想像上の預金者となるのである。彼れは銀行に對する小切手を以つて、債權者に支拂ふ、而してこの小切手を受けた人は、之れを以つて更らに自己の取引銀行業者に支拂ふ。而してこの銀行業者は、手形交換所に於いて之れを自己に對する小切手と交換するのである。この場合には、銀行券は毫も介在し來たることなく、全取引は、銀行の請求權が銀行自身に對する小切手に依つて清算され、銀行の現實的報償がAに對する信用請求權に存してゐるといふ一點に局外される。この場合、銀行はAに對して自己の債務請求權を前貸するのであるから、隨つてその銀行資本の一部を前貸したことになるのである。

金融に對するこの需要が資本に對する需要である限り、それはただ貨幣資本に對する需要たるに過ぎない。換言すれば、銀行業者の立場から觀ての資本に對する需要、即ち金が外國に流出する場合について言へば、金に對する需要其他の場合には國立銀行券に對する需要たるに過ぎないのである。國立銀行券なるものは、等價を以つて購買するにあらずんば個人銀行の手に入り得ないものであるから、個人銀行にとつては即ち資本を代表するものとなつて来る。或は最後に、金又は銀行券を得る目的を以つて賣却せねばならぬ利子附有價證券たる國債券や、株式其他のものが問題になるとする。此等のうち國債券の如きは、それを購買した當人にとつてのみ資本である。彼れにとつて、斯かる國債券はその購買價格を、それに投じた資本を代表するからである。けれども國債券なるものは、それ自身に於いては何等の資本にあらず、單なる債務請求權に過ぎない。

また、土地抵當證書の如きは、將來の地代に對する請求權に過ぎず、株式の如きは、將來の餘剩價值收納を權利づけるところの所有名義に外ならないものである。此等一切の物は何等の現實的資本にあらず、資本の何等の組成分ともなるものではなく、それ自身に於いては何等の價值たるものでもない。同様の取引に依つて、銀行の所有に屬する貨幣は預金に轉化せられ得る。かくして銀行は此貨幣の自己債務者たる代りに、他の異つた所有名義の下に之れを保持することとなるのである。之れは銀行自身にとつては極めて重要な事であるが、國內に存する資本の量は固より、貨幣資本の量の上にも變化を與へることはない。この場合、資本は單に貨幣資本たる機能を盡すに過ぎず、若し現實的の貨幣形態を以つて存在しないとすれば、斯かる場合には單なる資本名義を代表するに過ぎないものとなる。之れは極めて重要な事である。蓋し銀行資本の拂底と接した需要とは、現實的資本の減少(斯かる場合には、現實的資本は寧ろ、生産機關及び生産物の形態を以つて過剰に存在し、市場を忙殺してゐるのであるが)と混同されるからで

ある。

それ故、流通要具の總量が不變であるか又は減少した場合、如何にして銀行に擔保とされてゐる有價證券の量が増大し、膨脹した金融需要が銀行に依つて充足され得るやうになるかは、極めて容易に説明し得る所である。而して流通要具の總量は、斯くの如き金融逼迫の場合二様に制限される。即ち(一)貨幣流出に依つて、(二)發行された銀行券が直ちに回流する場合か、又は銀行券を發行することなく、帳簿上の信用を以つて取引が進展し、單なる信用取引を以つて支拂が媒介され、支拂の清算といふことが取引上の唯一の目的となる場合には、單なる支拂要具としての貨幣の需要に依つて、貨幣がただ支拂の清算に役立つといふだけの所に在つては(而して恐慌期には、購買をなす爲ではなく、支拂をなす爲に、新たな取引を開始する爲ではなく、過去の取引を處理する爲に、前貨を受けるのである)、貨幣の媒介に依らず信用取引のみを以つてしては、清算を行ふことが不可能であるとしても、貨幣の流通は微々たるものに過ぎず、隨つて金融の需要大なる所に在つては、流通を擴大することなくして此取引の驚くべき大量が行はれ得ることになるのであるが、斯かる事實こそ即ち貨幣の特質となつてゐるのである。けれどもイングランド銀行に依つて豊かたる金融が與へられてゐるとき、同銀行の流通は同時に固定して居り甚しきは低減することもあるといふ、單にそれだけの事實を以つて、かのフライトンやトックなどが(金融を以つて追加資本の借受と同一視する謬見から出發して)主張する如く、支拂要具たる機能を盡す貨幣(銀行券)の流通は増大するものでなく、擴大されるものではないと、無造作に推斷することは許されない。斯くの如き豊かたる金融を必要とする營業沈滞の時期に在つては、購買要具としての銀行券の流通は減少するが、支拂要具としての銀行券の流通は増大し得る。而も流通の總高(購買要具として、また支拂要具として作用する銀行券の總高)は、固定的たることも、甚しきは減少を來たすこともあり得

る。發行銀行に忽ち回流する所の銀行券が支拂要具として流通することは、此等の經濟學者から見れば何等の流通でもないといふことになる。

支拂要具としての流通の増加率が、購買要具としての流通の減少率よりも大であるとすれば、購買要具たる機能を盡す貨幣の量は著しく減少するとはいへ、流通の總高は増大することになるであらう。而して此現象は、恐慌期中信用が全く失墜して、單に商品や有價證券が販賣不可能となるのみではなく、また爲替手形も割引不可能となり、現金支拂以外には通用する方法がなくなるといふ瞬間に、現實的に生じて來るものである。フライトン其他の學者は、銀行券が支拂要具として流通することは斯くの如き貨幣拂底期の特徴であることを理解しなかつたから、この現象を偶然的のものとして取扱ふやうになつたのである。「銀行券を獲得しようとして醸される此等の熱烈なる競争は、恐慌期の特徴となるものであつて、一八二五年末に於ける如く、地金銀の流出が尙ほ進行してゐる場合にも、其發行は瞬間的とはいへ突如として増大を來たすことが時としてあり得る。けれども斯くの如き競争は、低微なる交換の自然的又は必然的なる隨伴現象に屬するものと見做すべきではないと、私は氣づかつてゐる。斯かる場合の需要は、流通(購買要具としての流通と謂ふべきである)を目的とするものではなく、退藏を目的とするものである。それは、警戒状態に陥つてゐる銀行業者や資本家側の需要であつて、流出が久しく持續した後、恐慌の最終段階に入つてから支拂要具準備金の需要として生ずるものであり、恐慌終熄の先驅となるものである」(フライトン前掲、第一三〇頁)。

支拂の連鎖が急激に中断されたとき、如何に貨幣が價値の單なる觀念的形態から、物的たると同時に絶對的なる價値形態(商品に對立しての)に轉化されるかは、支拂要具としての貨幣を攻究せる際(第一卷、第三章、第三節、b)すでに説明した所である。これに關する若干の實例も、同じ場所に(註第百及百一)に與へて置いた。斯様な中断は

一部分には信用の動搖と、それに伴つて生ずる諸種の事情(市場の荷嵩み、商品の價値減少、生産の中絶等)との結果であると同時に、又一部分にはその原因となるものである。

けれどもフライトンが、購買要具としての貨幣と支拂要具としての貨幣との區別を、通貨對資本間の虚偽なる區別に轉化したことは明かである。而してこれについても亦、偏狹なる銀行業者的の流通觀が根柢に横つてゐる。

更らに斯ういふ問題も起つて來るであらう。斯かる逼迫期に缺如する所のは、果して何であるか? 資本であるか、それとも支拂要具としての機能に於ける貨幣であるか? 而して之れが一つの論争問題となつてゐることは、人の知る所である。

先づ、金融逼迫が金の流出上に示される限り、要求される所のもが國際的の支拂要具なることは明かである。然し國際的支拂要具としての機能に於ける貨幣は、金屬的の現實性に於ける金であり、それ自身に價値の充實した實體としての、價値尺度としての金である。と、同時に又、それは資本である。が、商品資本としての資本ではなく、貨幣としての資本であり、語を換へていへば、商品の形を採つた資本ではなく、貨幣(而も一般的なる世界市場商品といふ高き意味での貨幣)の形を採つた資本である。この場合には、支拂要具としての貨幣に對する需要と資本に對する需要との對立は問題とならない。問題となるのは寧ろ、貨幣形態に於ける資本と商品形態に於ける資本との對立である。而してこの場合要求される所の資本形態となるもの、この場合機能を盡し得る唯一の資本形態となるものは、即ち貨幣形態である。

金(又は銀)に對するこの需要を措いて問はないとすれば、斯かる恐慌期中如何なる様式に於いても資本が缺乏を來たしてゐるとは言ひ得ない。穀物の不作、棉花の拂底、其他の如き異常なる事情の下に於いては、資本の缺乏も行

はれ得るであらう。けれども此等の事情は決して、必然的又は規則的に、斯かる恐慌期に相伴ふものではない。それ故、金融に對する熱烈な需要が存すればとて、單にそれだけの事實から、斯様な資本缺乏の存在を結論し得るものではない。寧ろ反對に、市場は供給過多となり、商品資本を以つて充ち溢れてゐる。要するに、拂底を生ぜしめるものが商品資本の缺乏でないことは明かである。この問題については後に尙ほ論究する。

資本論 第三卷(上)終

資本論第三卷(上)原語及び譯註

編輯者序文

- (1) W. Lexis, Conrads Jahrbuecher, XI, 5, 1885, S. 452-65.
- (2) Dr. Konrad Schmidt, Die Durchschnittsprofitrate auf Grundlage des Marxschen Wertgesetzes. Stuttgart, Dietz 1889.
- (3) 英譯本では『平均利潤』(average profit)となつてゐる。誤植であらう。
- (4) P. Fireman, Conrads Jahrbücher, dritte Folge, III, S. 793.
- (5) Julius Wolf, Conrads Jahrbücher, neue Folge, II, S. 352 und ff.
- (6) Achille Loria, Nuova Antologia, April 1883.
- (7) A. Loria, La teoria economica della costituzione politica, 1886.
- (8) 此一句、英譯本では“by selling its products to them etc.” (its= commercial capital, them=those luckless victims)『此等の不運なる犠牲者に對し自己の生産物を無料で……販賣することに依つて』となつてゐて全然意味を取り違へてゐる。原文は „indem es (Handeskapital) ihnen ihre Produkte etc.“ である。
- (9) George C. Stiebeling, The Law of Value and the Rate of Profit, New York, John Heinrich.

第一編

第一章

- (1) Kostpreis.
- (2) 英譯本では商品資本 (commodity-capital) となつてゐる。誤植であらう。
- (3) 英譯本では賃銀 (wages) となつてゐる。誤植であらう。
- (4) Malthus, Principles of Pol. Econ. 2nd. edit. London 1836, p. 267, 268.
- (5) Malthus, Definition in Pol. Econ. London 1827, p. 86.
- (6) Unterverkauf (underselling).
- (7) Produktionspreis.
- (8) R. Torrens, An Essay on the Produktion of Wealth, London 1821, p. 51—53, p. 70 & 71.
- (9) Falzac, Les Paysans.

第二章

- (1) Rate des Mehrwertes.
- (2) Proffirate.
- (3) Uebervorteilung.
- (4) eigentlicher Wert (valeur intrinsèque).

第三章

- (1) Principles, ch. I, sect. III, p. 18, Works of D. Ricardo, ed, MacCulloch, 1852.

第五章

- (1) 英譯本では『他の部門に於ける不拂労働の』(…… of the unpaid labour in other lines) となつてゐる。原文 „……fremder unbezahlter Arbeit etc.“ 中の fremder を感ちがひしたものらしいが、斯様に譯しては全然意味をなさぬ。
- (2) First Report on Children's Employment in Mines and Collieries, etc, April 21, 1829, p. 129.
- (3) National Association for the Amendment of the Factory Laws.
- (4) „bis zur Hälfte mehr……“ 英譯本では『二倍量にも及ぶパン……』(as high as twice as much bread) となつてゐる。
- (5) Dureau de la Malle, Econ. Pol. des Romains. Paris 1840, I, p. 280.
- (6) allgemeine Arbeit.
- (7) gemeinschaftliche Arbeit,

第六章

- (1) The Factory Question and the Ten Hours Bill. By R. H. Greg, London 1837, p. 115.
- (2) 英譯本では『少くとも通常の期間、その基礎的構造に於いて不變なる……』となつてゐる。誤譯であらう。
- (3) labour test.
- (4) experimente in corpore vili 無價値體實驗。

第二編

第九章

- (1) 原文も英譯本も「二二パーセント」となつてゐるが、誤植であらう。
- (2) Produktionspreis.
- (3) 英譯本には『第一卷』となつてゐるが、誤謬であることは言ふ迄もない。
- (4) Durchschnittsprofit.
- (5) Kapital von höherer Zusammensetzung.
- (6) Kapital von niedrigerer Zusammensetzung.
- (7) Kapital von durchschnittlicher Zusammensetzung.

第十章

- (1) Wertpreis.
- (2) Law of settlement.
- (3) 原文には『自然的』とあれど、次の問との聯繫を明かにするため斯く譯す。
- (4) Marktwert.
- (5) Marktpreis.
- (6) Surplusprofit.
- (7) 原文では『或は昂騰し或は低落する』となつてゐるが、之れでは理窟に合はぬやうに思はれる。
- (8) Observations on some verbal Disputes in Political Economy, etc. London, 1821, p. 53, 54
- (9) 英譯本には『在來の棉花量を生産するを要し』となつてゐるが、之れでは全然意味をなさぬやうに思はれる。
- (10) An Inquiry into those Principles respecting the Nature of Demand etc. London 1821, p. 105.
- (11) natural price.

- (12) price of production.
- (13) cost of production.
- (14) prix nécessaire.

第三編

第十三章

- (1) Ryot インドの農民。
- (2) 『減少』 Abnahme とあれど Zunahme の誤植なることは明かである。
- (3) Ricardo, Political Economy chapt. VII. Works, ed. MacCulloch, 1852, p. 68.
- (4) Veräußerungsprofit (profit upon alienation)

第十五章

- (1) この所、英譯本では『資本に就いて言へば、生産力なるものは生産労働一般の増進に依つて高められるものではなく、過去労働に支出した所よりもヨリ多くを生きた労働の不拂部分に於いて節減することに依つてのみ高められるものである』となつてゐて、大分意味が違ふやうである。
- (2) 原文は『生産費』となつてゐるが、これでは前の句に對して意味が通じないやうに思はれる。英譯本では『生産價格』と改めてある。
- (3) Richard Jones, An Introductory Lecture on Pol. Econ. London 1833, p. 50 et seq.

第四編

第十六章

- (1) kaufmännisches Kapital.
- (2) Handelskapital.
- (3) Warenhandlung kapital.
- (4) Geldhandlungskapital.
- (5) この『彼れ』は前の『産業資本家』を指すものと解するが至當であると考へられる。然るに原文では『産業資本家』の方は des Industrillen (der Industrielle) にて男性單數となつてゐるのに、この『彼れ』は ihr (sie) となつてゐて性が合はない。この場合もし性を一致せしめるとすれば、これは前の『生産』を代表するの外はないこととなるが、それでは意味がよく通じない。

第十七章

- (1) 原文は…… „gleich dem Überschuss des ersteren über den letzteren“ となつてゐて前者と後者が轉倒してゐる。
- (2) 原文には『販賣者』となつてゐるが誤植であらう。
- (3) provision, tantième.
- (4) この一句、英譯本では『この利潤は、豫め存在を假定されてゐる平均利潤率の水準に比例するものである』となつてゐる。誤譯と思はれる。

第十八章

- (1) Corbet, An Inquiry into the Cause; etc. of the Wealth of Individuals. London 1845, p. 15.
- (2) 英譯本では『少量の商品に多量の労働が對象化してゐる場合には』となつてゐる。
- (3) Feller & Ollermann, Das Ganze der Kaufmännischen Arithmetik, 7. Aufl. 1859.

第十九章

- (1) Geldhandlungskapital.
- (2) 英譯本では括弧を抹除して、此等の數語を、次ぎの句に結びつけてゐるが、それでは意味をなさないやうに考へられる。
- (3) Hüllmann, Städtewesen des Mittelalters. Bonn 1826—29, I. p. 437.
- (4) S. Vissering, Handboek van praktische Staathuishoukunde. Amsterdam 1860, I, 247.
- (5) E. Lusac, Hollands Rhydom, deel III.
- (6) Kassiers briefjes.

第二十章

- (1) W. Kiesebach, Der Gang des Welthandels im Mittelalter, 1860.
- (2) Zwischenhandel (carrying trade).
- (3) Martin Luther, Bücher vom Kaufhandel und Wucher, vom Jahr 1527.

第五編

第二十一章

- (1) Gilbert, The History and Principles of Banking. London 1834 p. 163.
- (2) この一句、英譯では「資本は資本たる限り、流通行程の内部ではなく生産行程の内部に於いてのみ現實的の機能を盡すものである」となつてゐる。
- (3) Gratuité du Crédit. Discussion entre U. F. Bastiat et M. Proudon, Paris 1850.
- (4) An Essay on the Governing Causes of the Natural Rate of Interest, wherein the sentiments of Sir W. Petty and Mr. Locke, on that head, are considered. London 1750, p. 49.
- (5) Colonel R. Torrens, On the Operation of the Bank Charter Act of 1844, etc. 2nd. ed., 1847.
- (6) Took, Inquiry into the Currency Principle, p. 77.
- (7) Adam Müller, Elemente der Staatskunst. Berlin 1809, p. 37.

第二十二章

- (1) Took, History of Prices from 1839 till 1847. London 1848. p. 54.
- (2) Theory of Exchanges. The Bank Charter Act of 1844 etc. London 1896. p. 80.
- (3) G. Opdyke, A Treatise on Political Economy. New-York, 1851
- (4) K. Arnd, Die naturgemässe Volkswirtschaft gegenüber dem Monopolienegeist und dem Kommunismus usw. Hanau 1845.
- (5) J. Steuart, Principles of Pol. Econ. Franz. übers. 1889, IV, p. 27.

第二十三章

- (1) Bosanquet, Metallic, Paper, and Credit Currency, p. 73.

- (2) Thomas Tooke, An Inquiry into the Currency Principle, 2nd ed. London, 1844. p. 80.
- (3) Aufsichtslohn (wages of superintendence of labour).
- (4) 英譯本では because their relation refers only to themselves and to the profit etc. (此等兩部分の關係は兩部分それ自身と……利潤とにのみかかはるものであるから) となつてゐて全く意味をなさない。their を this に改め、themselves を labour に改むる必要なきか。
- (5) J. E. Cairnes, The Slave Power. London 1862 p. 48.
- (6) villicus. 此語は villá (村落) から轉じたものである。
- (7) familia rustica.
- (8) Mommsen, Römische Geschichte. Zwite Auflage 1856, p. 808—810.
- (9) Epitropos.
- (10) régisseur.
- (11) Hodgskin, Labour defendel againgt the Claims of Capital etc. London 1825 p. 27.
- (12) J. St. Mill, Principle of Political Economy 2nd ed. London 1849 I. p. 463.
- (13) The City or the Physiology of London Business, with Sketches on Change, and the Coffee Houses London 1845.
- (14) 原本には『八百乃至九百磅』となつてゐるが、英譯本には『八千九百磅』となつてゐる。この引抄の原本は英書であつて、英譯本の方は直接この原本から引抄したものと思はれるから、暫く英譯本に従ふこととする。意味から言つても、八百磅や九百磅では少額すぎる。

第二十四章

- (1) Richard Price, An Appeal to the public on the Subject of the National Debt, 2nd ed. London. 1772.
- (2) Richard Price, Observations on reversionary Payments etc. London 1782.
- (3) Josiah Child, Traité sur le Commerce etc. traduit etc. Amsterdam et Berlin, 1754, p. 115, Geschrieben 1669.

第二十五章

- (1) W. Leatham, Letters on Currency, 2nd edit., London 1840.
- (2) cash credit. 昔スコットランドに流行した保證貸附、有爲の商人にして資金なき者に融通を與ふるため二人以上の證人を立てさせて貸附をなす方法をいふ。
- (3) Ch Cojuelin, Du Crédit et des Banques dans l'Industrie. Revue des deux Mondes 1842, tome 31.
- (4) Fullarton, On the Regulation of Currencies, 2nd edition, London, 1845, p. 38.
- (5) J. W. Gilbart, The History and Principles of Banking London, 1834.
- (6) I promise to pay.
- (7) Currency Question reviewed, etc, p. 62. 63.

第二十六章

- (1) J. G. Hubbard, The Currency and the Country. London 1843, p. 41.

第二十七章

- (1) 英譯本では『利子の作用』となつてゐる。

第二十八章

- (1) J. G. Kinneer, The Crisis and Currency. London 1847.
- (2) Leihpfand (collaterals). 銀行が貸附の爲に抵當物を取るのには、之れを副抵當又は間接抵當として受入れるのであつて、抵當物は單に債務者が其義務を果たし能はざる場合に對してのみ準備するものである。副抵當として用ゐられるものは公債證書、株券、船荷證券等の如き有價證券である。

資本論 第三卷 (上) 終



大正十五年五月三十一日印刷
大正十五年六月二日發行

(定價五圓五拾錢)

資 本 論

第 三 卷 上

翻譯者

高 畠 素 之

發行者

東 京 市 牛 込 區 矢 來 町 三 番 地
佐 藤 義 亮

印刷所

東 京 市 小 石 川 區 西 江 戶 川 町 二 十 一 番 地
富 士 印 刷 株 式 會 社
印 刷 者 佐 々 木 俊 一

發行所

東 京 市 牛 込 區 矢 來 町 三 番 地
振 替 (東 京) 一 七 四 二 番

新 潮 社

電 話 牛 込 區 八 〇 六 番 · 八 〇 八 番
八 〇 七 番 · 八 〇 九 番

「資本論」第三卷(下)

九月下旬發行の豫定

高 畠 素 之 氏 著

思想文藝講話叢書第十三編

マルクス十一講

忽九 ち版

- ▼四六判紙數五百三十頁
- ▼總洋布最上製
- ▼定價貳圓五拾錢
- ▼郵送料拾貳錢

■萬人渴望の名著として今や異常の歡迎を受けつゝあり

「マルクス十二講」を讀みて

白 柳 秀 湖

高畠氏近著「マルクス十二講」を一讀して僕はむづかしい複雑な學問上の道理を平易に、明晰に書きこなすといふ割の悪い、報いられる所の極めて薄い仕事の共鳴者を見出したといふ點に於いて、感心したといふよりも、寧ろ涙ぐましいほどのうれしさを感じた。此書は、高畠氏が過去十數年に互つて世に提供した譯述のエキスを世に提供したもので、マルクスの『資本論』はもとより、カウツキーの『マルクスの經濟學說』アーサーレウイスの『社會學入

門』に近い處ではツガンバラノウスキーの『マルキシズムの學說的基礎』其他マルクス、エンゲルス等の手に成つた社會主義學說の貴重な文獻から取つて來た、眼に見えぬ「だ」が清い澄んだ汗となつて見事一椀の中で盛られて居る。高畠氏としては恐らく最初の自信ある『著述』であらう。

れぬ心安さである。撰氏が、高畠氏は由來逐字譯趣味であつたのが近來意譯趣味に傾いて來たと評して居るのも、一面に此邊の消息を傳へたものと云つてよからう。併し、高畠氏の心安さは怠けものが投出した心安さではなく、有らゆる困難と危険とを冒して頂上に達した登山者が、峠から今來た道を俯瞰し、更に下界を展望した時の心安さである。

讀んで行くとき全驚到る處に高畠氏の自信と、自信から來た心安さとが窺はれる。その心安さは、恐らくマルクスの譯述にもカウツキーの譯述にも窺は

る。讀んで行くとき全驚到る處に高畠氏の自信と、自信から來た心安さとが窺はれる。その心安さは、恐らくマルクスの譯述にもカウツキーの譯述にも窺は

第一講の「マルクスの生涯及び事業」は比較的單調な併しながら貴い犠牲にみち／＼したマルクスの生涯を語りつゝ、その著作を年表的に解題したもので、第三講以下に至り、マルクスの學說を

解説する上に最も手際よき準備を整へてゐる。併し全篇を通じて僕は第二講の「マルクスの唯物哲學學說」に最も感心をした。勿論、マルクスの學說として重要な點は、マルクスの労働價值説(第六講)剩餘價值説(第七講)で、此段は昔から日本の學者の間にも、又社會主義者の間にも翻譯學說の最も困難な部分として定評のあつたものであるが、之は要するにマルクスが労働力を中心として建設した新しい經濟學說であつて、純正科學の領域に屬すべき部分である。

の學說との微妙な關係を如何にも明晰に如何にも平易に説明して居ることである。之は恐らく高畠氏を俟つて、初めて成し遂げられた仕事で、僕は今度「マルクス十二講」の中で此點に最も敬意を拂つた。

▼萬朝報曰く、由來マルクスの學說は難解だといふ定評であるので、例へば唯物史觀、剩餘價值説等、その名前が一般的に知られてゐて、その實際の内容に至つては殆ど正しく理解されてゐない觀がある、本書はさうした缺陷を充たして一般人にマルクスの諸學說の眞髓を傳へる役目を果たすことであらうと思ふ。これまでこの種の著述がない譯ではなかつたが、本書程よく噛みくだいて彼の學說の全般を説明したものは見當らなかつたといつてよい、その點流石この著者丈かと思はしめられると共に、本書をして或る意味においてはマルクス普及の劃時代的な刊行たらしめることであらうと思ふ。

併し翻譯の困難といふことは別として、今日では、此學說の内容といふものは、漸く學者の間に理解せられて來て、必ずしも高畠氏の解説を俟たぬのであるが、僕は此マルクス學を解説する上に高畠氏でなければ出來ぬ仕事、少くとも高畠氏にとつて成された最も大きい仕事と思ふのは、マルクスを此經濟學說に導いた唯物史觀、唯物史觀の基礎工事を爲してゐる十九世紀中葉の實驗哲學、或は唯物哲學とマルクス

は實にマルクスの歴史哲學の基礎工事を爲したものであり、其色彩と芳香とは剩餘價值説を前提とするマルクスの資本主義經濟組織の崩壊説と即いて離れぬのである。

右は「讀賣新聞」に連載された長文の批評の中の一節である。

右は「讀賣新聞」に連載された長文の批評の中の一節である。

小栗慶太郎氏著

思想文藝講話叢書第十六編

進化思想十一講

(刊近)

▼四六判紙數五百三十頁
▼總洋布最上製
▼定價貳圓五拾錢
▼郵送料拾貳錢

■近代的諸思想の精髓を把握せんとせば先づ進化思想を究めよ

二十講 目次

- 第一講…ダーウキンの自然淘汰説
- 第二講…ハックスレーの人猿同祖説
- 第三講…ワイスマンの生殖物質繼續説
- 第四講…デフリーの突然變異説
- 第五講…メンデルの遺傳法則論
- 第六講…コントの人類發達説
- 第七講…スペンサーの社會有機體説
- 第八講…マルクスの唯物史觀説
- 第九講…クロボトキンの相互扶助説
- 第十講…タルドの模倣説
- 第十一講…ウオードの社會動學説
- 第十二講…オッペンハイマー征服國家説

哲學社會學に限らず、あらゆる部面の思想は、ダーウキンの進化論の洗禮を受けて新たな段階へ導かれたものである。換言すれば近代に於ける凡ての思想は、何等かの意味で進化論に基礎づけられてゐないものはないのである。謂ゆる社會思想の如きは、社會的部面に應用され發展せしめられた進化論に外ならぬ。従つて近代的諸思想の精髓を把握しようとする者は、先づ進化思想を究めねばならぬこと勿論である。社會の智識的水準は著しく高騰して來た。進化的思想の理解も最早専門學徒だけの必要に止まらない。生物界及び人類社會の進化に關する諸提説を、通俗簡明に壓縮し、公平な解説を試みた本書の刊行は、最も時を得たものであることを信ずる。

マルクス思想叢書

—高畠素之編—

第一編	マルキシズムの根柢 (エンゲルス著) 石川準十郎譯述
第二編	マルキシズムの哲學 (アドラー著) 小栗慶太郎譯述
第三編	マルキシズムの國家論 (ケルゼン著) 高畠素之譯述
第四編	マルクス資本論の展開 (カーン著) 小栗慶太郎譯述
第五編	マルキシズムの人口論 (カウツキー著) 松下芳男譯述
第六編	マルクスの唯物史觀 (クロイチエ著) 矢部 周譯述
第七編	マルクスの歴史哲學 (ケルゼン著) 堀 眞 琴譯述
第八編	マルキシズムの擁護 (カウツキー著) 安部 浩譯述
第九編	マルキシズムの崩壊 (シンコウツチ著) 神永文三譯述
第十編	マルクス價值説の終焉 (パウエル著) 神永文三譯述

・近刊・ 刊行は、必ずしも第一編より順序を追ふことをせず、原稿の成るに従つて公にすべく、既に第三編、第四編の如きは、製版出來、近々刊行の手筈である。(定價壹圓八拾錢の豫定)

社會哲學新學說大系

北 聆 吉 氏 高 島 素 之 氏 共 編

第一編	唯物史觀の改造	高ツガン・バラノフスキイ 高島素之氏譯述
第二編	社會學的認識論	ラッツエンホーフ 宮崎市八氏譯述
第三編	時間と自由意志	北ベル 聆吉氏譯述
第四編	田園・工場・仕事場	中ク 山ロボトキ 啓氏譯述
第五編	富國論	神ア 永タム・スミ 文三氏譯述
第六編	社會生活と精神生活	高オ 橋イ正熊氏譯述
第七編	政黨心理の研究	西ロ ベルト・ミヒエ ルニ郎氏譯述
第八編	社會學通俗教科書	神ギ 永ツ文チ三氏譯述
第九編	マルクス經濟學批判	石川 準十郎氏譯述
第十編	社會學思想の人生的價值	高アル ヒオン・ウエ・スモ ル素之氏譯述
第十一編	プラトン理想國	津久 井龍雄氏譯述
第十二編	財産の進化	高ホ 島イル・ラフ 素之氏譯述
第十三編	實踐倫理批判	高カ 井篤 氏譯述

新四版六布背特製◆紙數一册約二百三十頁
— 定價各册壹圓貳拾錢◆送各料册拾錢 —

終